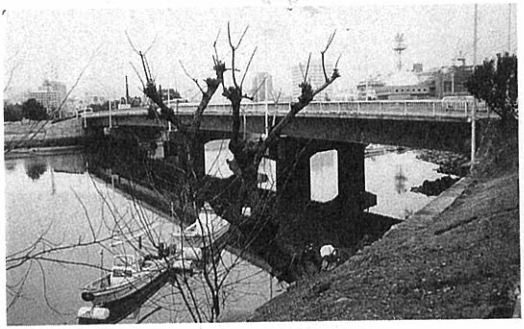


空鞘橋

善応寺・鍛冶稲荷大明神

（二）道筋と現状

1　堺町から祇園まで

天正十七年（一五八九）毛利氏によって広島城が築かれた後、福島氏の時代にそれまで城の北方を通っていた西国街道が、城の南方に引き入れられた。脇往還としての雲石路は、この時、堺町二丁目から分かれ北に向かうことになる。その後、寛永十年（一六三三）には、道幅七尺（二・一メートル）に整備され、陰陽を結ぶ重要な交通路となっていく。

当時の西国街道は、現在本川橋と天満橋を結ぶ道路にあたり、広島電鉄江波・横川線の電車通りの一本東側の道が雲石路になる。したがって雲石路は、現在の堺町一丁目で西国街道から分かれ北に向かうことになる。

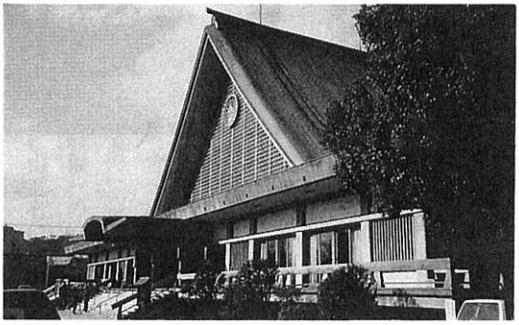
さて、堺町で西国街道と分かれた雲石路は、猫屋町から十日市に入る。「十日市」というのは、十日毎に市が立ったところからつけられたもので、広島築城後、古市にいた吉田商人達が移ってきて商売をはじめたという。

相生通りに出る一つ手前の小路を右に入ったところに「善応寺」がひっそりと佇む。うっかりすると見過ごしそうな小さなお寺だが、境内のお堂の前に赤い鳥居が建ち「鍛冶稲荷大明神」の額が鳥居にかかげてある。ここは現在本川町であるが、藩政時代は鍛冶屋町のあった地で、鎧鍛冶、刀鍛冶、具足鍛冶など火業を職とする家が多く集まっていたところである。鍛冶稲荷大明神は、寺の守護神として、また鍛冶の守神として、寛政十年（一七九九）山城国伏見稲荷から勧請されている。そして現在に至るまで、鞴祭（ふいごまつり）の神として、一般商売繁昌の守神として広く崇拝されている。

電車通りを越え北に進むと城南通りと交叉する。この通りの北は寺町になる。右に行くと空鞘橋。空鞘橋付近は、藩主が鷹狩りのときに渡る目的ではじめられた「空鞘渡し」の設けられた所である。後の元和九年

空鞘神社

広瀬神社



本願寺広島別院

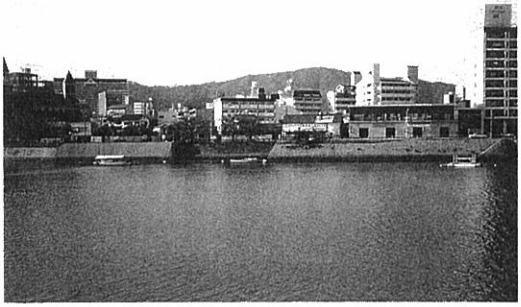
（一六二三）空鞘町の木屋太兵衛によって賃金で渡す渡し船がはじめられた。その後、大正四年横川線が開通するまで続けられていたが、今はなくなっている。

空鞘橋のすぐ南には「空鞘稲生神社」がある。天文年間（一五三二年頃）の創建といわれ、毛利氏の崇敬厚い神社であった。空鞘という名称は、境内の松の大木に刀の鞘のみが掛かっていたところからつけられたという。

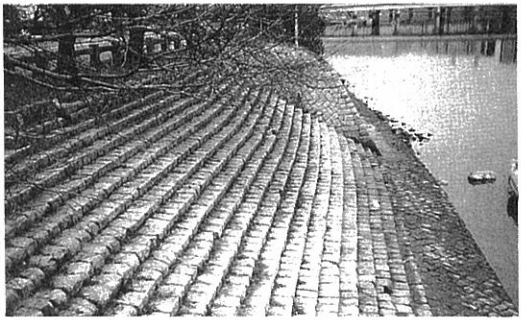
また、神社の境内東北隅に、「出雲大社道・四一里・文久元年」（一八六一）と刻まれた燈籠が保存されている。十日市と堺町との分かれ道に建っていたものである。原爆によって街が灰塵と化した時、この境内に移され保存されることになった。堺町に建っていた頃は、この燈籠の前に白装束にワラジ履きの参詣人が集合し、家族と別盃を交し、道中の無事息災を祈り合ったという。

城南通りを左に行くと、電車道を渡ったところに広瀬小学校がある。この小学校と道路を隔てた東側に「広瀬神社」が鎮座する。もとは廣瀬辨財天といっていた。毛利輝元の時、菩提寺洞春寺がこの地におかれることになり、鎮守の役割を果たすようになった。毛利氏の移封にともない、洞春寺は移転したが、神社はこの地に残った。享保八年（一七二三）には廣瀬大明神と改められ、明治五年には廣瀬神社として村社になる。原爆前は樹令三〇〇年以上の大樹におおわれていたが、焼失した。本殿は昭和五十年（一九七五）の再建である。

城南通りを越すと、寺町に入る。ここから横川橋までは両側に寺が建ち並んでいる。寺は原爆によってすべて焼失し、コンクリート造りの寺に生まれかわっている。寺町は城の西北の守りを固める意図もあって、慶長十四年（一六〇九）福島氏により、打越村小河内にあった「仏護寺」とその触下一二寺をこの地に移転させて成立した。現在では南から「超専寺」・「元成寺」・「真行寺」・「正善坊」・「光円寺」・「圓龍寺」・「徳応


大雁木

横川橋


大雁木

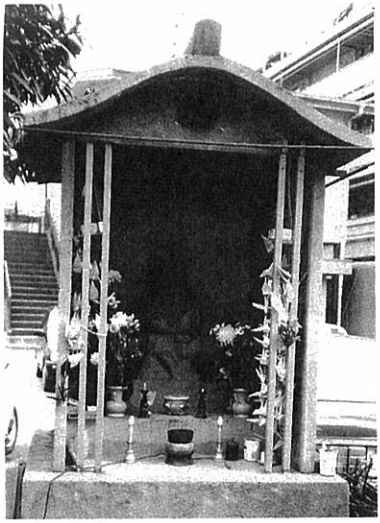
横川胡子神社

寺」・「善正寺」・「浄専寺」・「光福寺」・「報専寺」の順に並んでいる。これらの寺の北側にひときわ大きな寺院が目に入る。これが「本願寺派広島別院」、もとの「仏護寺」である。もともとこの寺は、安佐郡山本村龍原（現祇園北高校付近）にあった武田氏ゆかりの寺である。武田氏滅亡後、天正十七年（一五八〇）佐東郡打越村に移されていたものである。現在地に移されたのは慶長十四年（一六〇九）で、その当時は寺域三二五〇坪、末寺三五六か寺を、安芸・備後・周防・石見・伊予の五か国に持つ巨刹であった。しかし、元禄十四年（一七〇一）には一二坊との間に紛議がおこり、支坊・門徒の離反が起こり衰微したようである。それを浅野藩が支援し立ち直らせた。『芸藩通志』にはそのことが簡単に触れられている。以下書き出してみると、「元禄中、当寺と十二坊と争訟の事ありて衰微せしかば、藩より蔵に米二百苞づつを給し、封内より燈明銭、針米の施入を定めらるる、当宗西一派の巨刹なり、寺に、武田・毛利二氏の文書数通を蔵せり」。その後、本願寺派広島別院に改称したのは、明治四十一年である。

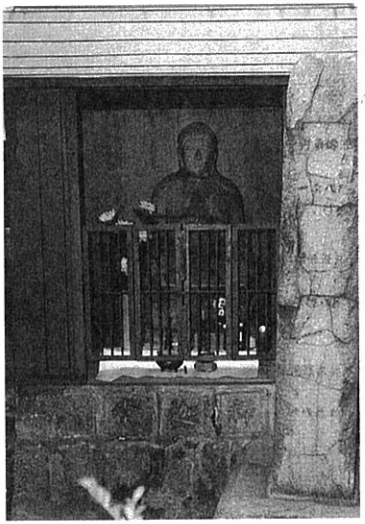
広島別院をすぎると、広島城下の北の入口に当たる横川橋である。この橋は毛利時代に架けられたのが始まりという。大正十二年に鉄橋になり、昭和六十年に現在のモダンなデザインの橋になった。

橋を渡ると旧楠木村に入り、横川の商店街が北に向かって延びる。『芸藩通志』の楠木村図にも雲石路に沿って町屋が描かれているので当時すでに商業的に発展していたものと思われる。

橋を渡ってすぐ右側の提防上に、商売繁盛を願う「横川胡子神社」がある。そろばん教室にも利用されているということだ。さらに土手を二〇〇メートル遡ったところに「大雁木」跡が残されている。太田川水系は、藩政時代物資輸送の大動脈で、雁木は安佐郡・山県郡方面からの川船の荷揚げ場であった。ここで荷揚げされた物資は、荷馬車や汽車（横川の引込み線）に積まれ各地へ送られていた。「大雁木」は以前より縮小して


石仏地蔵尊

燈籠


釈迦堂

いるそうだが、石段もしっかりとしており、十分使用に耐えうる状態にある。現在は、河川清掃事業のゴミ集積所として利用されている。

「大雁木」から少し上流に遡った三篠橋東詰付近は、今は高層アパートが建ち並んで昔の面影は残っていないが、「御材木場」が設けられていた。上流から多くの木材が筏で運ばれており、享保十年（一七二六）には「御材木奉行」がおかれるようになった。対岸の楠木村には「楠木の材木蔵」が設けられ、検査を受けた材木はこちら側に集められていた。「大雁木」付近を歩いてみると木材関係の会社・工場が多いことに気がつくが、木材の集積場としての歴史が現在に生きているということだろうと思う。

なお、雁木は下流の本川橋南にもよく残っている。ここには「常夜燈」も一緒に保存されており、川船で賑わった往時を偲ばせる。

横川橋を渡って真っすぐ進むと横川の商店街に入る。この商店街が城北通りと交叉する一つ手前の小路を右に入ると、「釈迦堂」がある。由来等は不明。隣には石碑が建っているが、欠けて読みにくい。ブロックに囲まれ、道路を背にしているので、よほど気を付けないとみつけられない。

城北通りに出ると、横川電停終点が道路中央に設けられている。これより北・太田川橋まで雲石路は、大部分旧国道に一致して通ることになる。

この旧国道に入り、ＪＲ山陽線のガードをくぐり、右に曲がると商店がガード下にずっと続いている。少し行ったところで、北へ向かって左に曲がったところに、高さ約二・五メートルの燈籠が建っている。いつ頃からこの場所にあるのか、もとからあったのかよくわからない。燈籠には「往来安全」「出雲大社エ四一里、石州濱田エ二五里、可部町エ四里」「明治八年（？）十一月」と刻まれている。

燈籠の隣には、牛尾家の守り本尊であったという、石仏の地蔵尊が祠

三篠神社

新庄之宮神社

夫婦楠

馬頭観音

の中に祭られ、並んで建っている。原爆で破壊されたので、戦後三滝からお迎えした地蔵だという。「夜啼き地蔵」と人々は呼んでいる。商売繁盛・家運隆盛・家庭円満・子宝拝授等の御利益があると信じられており、信者も多いと聞く。安政四年（一八五八）頃から信仰されてきたらしい。

ガードをくぐり真っすぐ進むと、すぐ左側に「三篠神社」がある。商店街に面して参道は狭いが、境内は広く木もよく繁っている。『芸藩通志』には、「黒皇神社」と記されている。承応三年（一六五四）現在地に宮を建て黒皇大明神と称す。大正三年、打越の青木神社・八幡神社・新庄の熊野神社を合併して三篠神社と改称した。原爆のため社殿等が焼失している。本殿は昭和二十三年再建されたものである。

三篠神社をすぎ、三篠三丁目に入ると、右手に新庄みそ（大正十二年創業）の工場がある。現在は吉田へ新工場をつくっているので、敷地の大部分がマンションになっている。

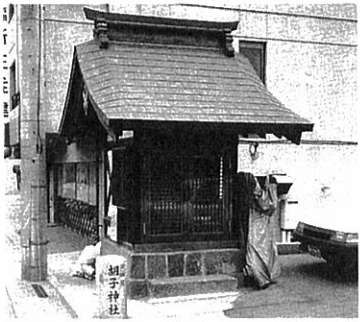
大宮町に入ると、阿武山の秀麗な姿が前方に見えてくる。新庄橋の手前を右に入ると、国道五四号に面した「新庄之宮神社」の社叢がみえてくる。この神社は「熊野神社」ともいい、「熊野神社」「橿原神社」「稲荷社」を合併した合祠社である。新庄村の村社として信仰を集めていた。この宮の社叢は、「新庄の宮の社叢」として昭和二十九年に広島県天然記念物に指定されている。その後、昭和三十九年に神社のすぐ東側に国道五四号が開通し、かなり大きな影響を社叢に与えたというが、夫婦楠は樹勢が衰えず現在にいたっている。この夫婦楠は、広島では数少ない巨樹で、市内から北へ向かう時の目印として多くの人に親しまれているものである。

この神社の西側には「馬頭観音」を祭ったお堂が建っている。これはもと新庄橋の南詰にあったものだが、太田川放水路建設のため現在地に移されている。雲石路で荷馬車等を扱っていた人々に信仰されてきた。戦前までは、八月の祭りに多くの馬が集まり賑わったという。

蓮光寺

長束神社

蓮華松

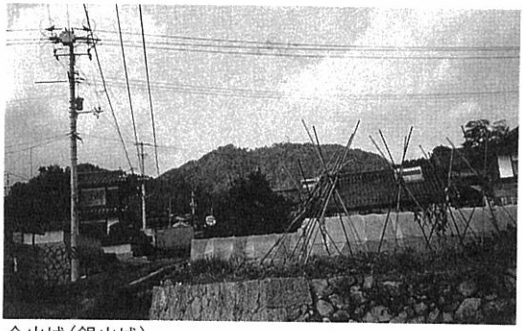

芦田屋胡子神社

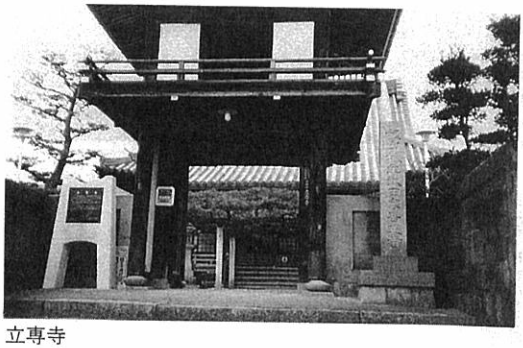
新庄橋を渡ると旧長束村に入る。この橋付近は太田川放水路が開通するまでは、新庄の集落が街道沿いに発達していたが、すべて移転して昔の面影はない。また、一里塚のあった一本木原もこの付近だが、これもその跡がわからなくなっている。

新庄橋を渡ったところで、提防に沿って上流に行くと、安川樋門（八木用水の終点）をすぎ、祇園大橋の北詰に出る。ここで国道五四号を横切り、約二〇〇メートル行った提防の下に「長束神社」が鎮座する。ちょうどダイイチの物流センターの裏にあたる。まわりは住宅に囲まれてしまっている。この神社は、貞観十二年（八七〇）長束村大年山に創建したというから、ずいぶん古い歴史をもつ神社である。その後現在地に遷座し、明治六年に「八幡宮」から「長束神社」に改称。長束地区の総氏神として信仰されている。昭和四十五年には、水の神を祭り太田川総水神と称した。

新庄橋から街道を北へ向かうと、広島市信用組合長束支店の手前道路左側に、小祠がある。いつごろからあるのか、よくわからない。さらに進むと、長束のバス停の手前道路右側には、「芦田屋胡子神社」の祠がある。長束神社の末社になる。芦田屋集落の商業発展を願って祭られたものであろう。

芦田屋胡子神社の先で、右折し狭い道を行くと安川に架けられたアーチ式の短い橋があり、その先に寺の本堂がみえてくる。「蓮光寺」である。創建は弘安六年（一二八三）と古い。はじめ天台宗であったが、明応五年（一四九六）真宗に転宗した。慶長四年（一五九九）から「蓮光寺」と称す。寺町から現在地に移ったのは、寛永七年（一六三〇）である。その際、記念に松を植えたのが現在まで残っており「蓮華松」と呼ばれている。目通り幹囲三・二メートル、樹高九メートル、四方に展開する枝が一二本、東西二六メートル、南北二五メートルに拡がり、おおわれる面積三〇〇平方メートルにも及ぶ。昭和二十九年広島県天然記念物に指定されてい


金山城（銀山城）


立専寺

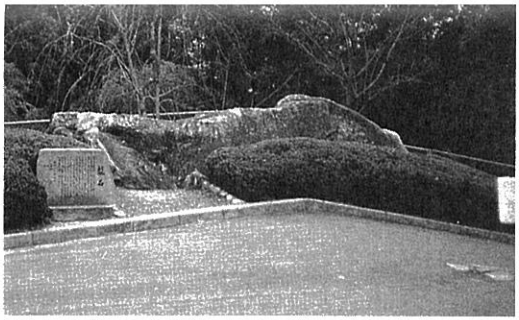
る。

さらに進み、安芸山本のバス停の信号を左に折れ、山本川を遡ったところに「立専寺」がある。この寺は武田氏の菩提寺である。もとは禅宗で「金龍寺」と称していた。武田氏が滅亡したため寺も荒廃したが、天文四年（一五三五）僧正春によって再興される。その時真宗に改宗し、寺号も「武将山立専寺」に改めた。山門は様式が古く天正年間（一五七三～一五九二）のものといわれている。

立専寺の北に武田山（四一〇・九メートル）がそびえている。この山には、鎌倉時代後期安芸国守護の武田信宗が「金山城」（「銀山城」と呼ばれるようになったのは近世以降である）を築いたと伝えられている。武田氏はこの城を根拠地として、近郷の香川氏（八木村）、熊谷氏（可部）、吉川氏などの豪族を従え勢力をもっていた。しかし、戦国時代に入ると、周防・長門の二国を勢力におさめた大内氏や、吉田の毛利氏らにおされ、天文十年（一五四一）毛利氏によって滅ぼされ、約三二〇年に及ぶ武田氏の支配が終わった。その間、武田山の麓には城下町としての祇園や古市の町を発達させてきた。武田山には現在、山頂の本丸を中心に、馬返し、御門、館跡、観音堂跡など五〇近くの遺構を残しており、県の史跡となっている（昭和三十一年指定）。

銀山城を中心とした武田山山麓には今でも、武田氏ゆかりの寺社が残っている。西から順にあげれば、広島経済大学の東に、武田氏の先祖新羅三郎を祀る「新羅神社」がある。その東には、安芸国守護武田太郎左衛門元繁が鎌倉鶴ケ岡八幡宮より勧請し、銀山城の守護神とした「熊岡八幡宮」がある。さらにその東には、武田一門の守護神で、江州坂本の日吉から勧請した「尾首日吉神社」がある。祇園北高校付近はもと龍原と呼ばれ、ここには武田義信の開基した仏護寺と十二坊のあった地である。祇園北高校正門手前の道路左側には、『芸藩通志』に「北下安村の龍原にあり、長さ一丈八尺、俗伝に天より降りしといふ」と記された「龍

いぼ地蔵


龍石

いぼ地蔵

武田氏の墓

石」が現在も残されている。

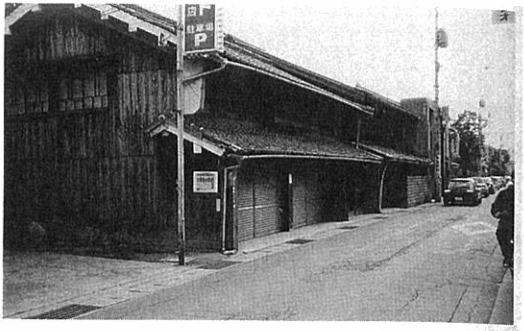
また、東山本九丁目には、『芸藩通志』に「武田光和の墓、東山本村、三王原にあり桜樹をしるす」と書かれている、武田家の墓所がある。武田山憩の森に登る途中、道を左に入った標高七〇メートル付近にあるのがそれで、武田山顕彰会によって石標「銀山城主武田氏の墓」が建てられている。しかし、ここが『芸藩通志』にいう武田家の墓であるという確証はないようである。

安芸山本のバス停を右に行くと、安川をまたいで八日市橋が架かっている。この付近は「八日市」と呼ばれてきた地である。『芸藩通志』の長東村図では単に市場とだけ記されている。現在の二万五千分の一地形図は「八日市」と表示している。『東寺文書』にも、文保二年（一三一九）佐東八日市の梶取り藤次が東寺領の年貢米を兵庫まで運んだと記録している。すると、相当古い時代からこの付近に市が発達していたことになる。

八日市を右手にみてさらに進むと、旧南下安村に入る。祇園の町の手前で、街道をおおうように枝を広げた二本の松が見えてくる。この松の木の下に小祠があり、「いぼ地蔵」と呼ばれている地蔵が祭られている。祠の中をみると高さ約一メートルの長方形の石が安置されている。「いぼ地蔵」と呼ばれるのは、ここに生えている松の葉で人の体にできたイボをつくとイボがとれるということからつけられたらしい。また、この地蔵は、別名「投石地蔵」とも呼ばれ、その昔武田光和が、武田山から投げた石が地蔵になったとも伝えられる。また、一説では、神社の力石だともいわれる。

この付近は「帆立」と呼ばれている。古くは「掘立」と書かれていたという。何故そう呼ばれるようになったのかはよくわからない。神武天皇にまつわる説では、当時この付近まで海が入り込んでおり、旅陣の際この付近で帆を立てたからだという。

「いぼ地蔵」をすぎると祇園の町に入る。この集落は『芸藩通志』に



杯状穴

熊野神社

「祇園町一市聚をなせり、是武田の故府なり」と記されており、銀山城の城下町として発達した集落である。地形的には、自然堤防上に立地し、町の中心を雲石路が通っている。祇園と呼ばれるようになったのは、旧北下安村の祇園社（現安神社）を中心に町が発達したことからと思われる。

町の西側から長束にかけては、東西八町、南北二〇町にわたる佐伯系の条里地割の跡も認められ、古くから開発されてきたことを示す。地名にも「坪井」「六反田」などが残る。

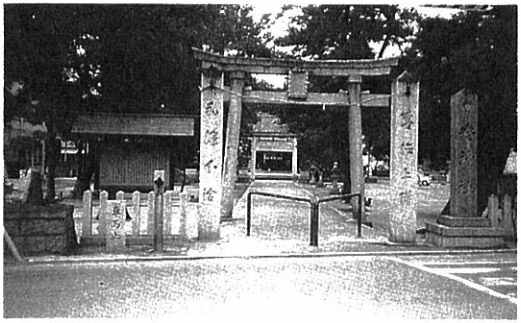
町屋の特徴をみると「うだつ」がみられる。これは防火のためとか・夜這いを防ぐためとかいわれているが、全部で三六確認されている。祇園の町も家の建てかえが徐々におこなわれており、「うだつ」を持つ古い家も次第に少なくなりつつある。

道路の特徴は、「折目」と呼ばれる道路形態を残す。これは街道を直角に折り曲げたものである。戦いの時、敵に見通されないようにするためわざと曲げたとか、大名行列に会った村人が土下座を短く終わらせるため曲げたとかいわれているが、真偽のほどはよくわからない。「いぼ地蔵」をすぎて、道が右にカーブした先に久保石材店があり、ここで道が右側に斜めに分岐している。この小路を三〇〇メートル進むとパチンコ店のある交叉点に出る。この交叉点が「折目」とよばれている道路である。現在ここには真っすぐ抜ける道と、右手の方からも道路が通じて十字路になっているので、予備知識がないと現地に行っても解りにくい。昭和三年の地形図では「折目」ははっきりと確認できる。

久保石材店付近は祇園の入口にあたり、「熊野神社」が鎮座する。和歌山県の熊野速玉神社の分霊で、火防の神でもある。境内には、天保七年（一八三七）と刻まれた「献燈」がある。この神社の前の旧道沿いにあったものを移したものである。この燈籠の台をみると、小さなくぼみがみられる。このくぼみは「杯状穴」と呼ばれ、豊作を祈願したり、乳がよく出るように、あるいは男の子が生まれるようにという願いを込めてた

桑原卯之助墓（右端）

安芸津彦神社


安神社

勝想寺

たいた跡である。

熊野神社をすぎて北に進むと、ＪＲ下祇園駅に通じる道のところで、「折目」の路が右側から合流する。さらに行くと右側に桑原家（八木用水を完成した桑原卯之助の子孫にあたる）の屋敷が街道沿いに建っている。桑原家は昭和六十年頃まで呉服屋を営んでいたというが、今は店をやめている。大きな屋敷で「うだつ」も設けられており、大きな倉もある。

桑原家の反対側を左に入ったところ祇園の集落のほぼ中央に「安芸津彦神社」が鎮座する。裏手はＪＲ可部線に面し、北は大下学園祇園高校に接する。この神社は『芸藩通志』では、「官幣社」と記されている。もとは青原に鎮座していた。明治五年に社号を「安芸津彦神社」と改めて現在にいたる。

安芸津彦神社の反対側は「勝想寺」である。街道の右に小さな案内板が出ており、小路を入ったところに寺がある。この寺は永禄元年（一五五八）に僧無庵によって開基され、元禄七年（一六九四）「勝想寺」となった。『芸藩通志』では「勝総寺」と出ている。寺には八木用水生みの親、桑原卯之助の墓が桑原家の墓所の中にある。桑原家の墓の中では小さい方に属し、墓石には「釈順正信士」と刻まれている。

さらに進むと祇園の町の北端に近づく。ここには「安神社」が鎮座する。人々から「祇園さん」と親しまれ、祇園町の名称のもととなった神社である。もと松尾山（現祇園中学校付近）にあり、出雲の宮の神を勧請し祀ったと伝えられる。正安元年（一二九九）戦火で焼けたが、御神体が御旅所（現在地）に置かれていたので焼失をまぬがれたという。武田氏・毛利氏・福島氏・浅野氏によって崇拝されてきたといわれる。明治六年には郷社となる。明治四十三年（一九一〇）には再び大火に会い、神殿・神器すべて焼失、御神体のみ難をのがれた。現在の社殿は大正五年に落成したものである。広い神域をもつが、東側は街道によって分断されている。街道の東側の飛地には、摂社の「恵比須社」が鎮座する。その北側

道標

冬木神社

道路をへだてて、天明四年（一七八五）と刻まれた高さ約五メートルの「常夜燈」が設けられている。そのさらに北側には、「太田三益翁碑」が建てられている。

安神社をすぎると、祇園の集落も終わる。今はこの先も連続して家が建っているので祇園の集落をすぎたことがわかりにくい。

三菱社宅前のバス停をすぎると「祇園橋」が架かっている。この橋のところで、安・加計方面への道が分岐している。この分岐点には「道標」がおかれていたが、今は安神社の境内に移され保存されている。「道標」には「右出雲大社道」「左やすかけ往来」と刻まれている。

その他、安川を越えた祇園の集落の東側の地には、冬木神社が鎮座する。『芸藩通志』西原村図の「八幡宮」がこれに当たり、正保元年（一六四四）創建という。冬木神社境内には、「尾喰寺楊柳観音」が六角堂に安置されている。六角堂という建物も珍しいが、「尾喰寺」というのもなかなかおもしろい呼び名である。その由来は、次のように語られている。弘安六年（一二八三）安芸国四郡を賜った武田信隆が、任地におもむく途中、近江国絹川で、楊柳観音に馬の尻尾を喰われたという。それでこの観音をこの地にもってきて、寺を建てて祭ったところから「尾喰寺」と呼ばれるようになったという。その後永正二年（一五〇五）真宗に転じ寺号も尾喰寺から清立坊に改められている。寺は現在西区古江東町に移り、誓立寺となっているが、観音様だけは西原の地に残ったといわれる。寺の境内には、「西原上十二神祇神楽」（昭和四十九年、広島市指定重要無形文化財に指定されている）の案内板も建てられている。それによると、この西原の地は古くから洪水に悩まされた地で、特に天明年間の大飢饉の時に大きな被害を出したので、神楽を奉納し五穀豊穣を祈ったことに始まるという。

（林　善久）